

六甲カトリック教会報

2005.10 No.406

10月のお知らせ

	教会暦	教会行事
1 土	聖テレジア（幼いイエスの）おとめ教会博士	10：00 祈りの道場（15：00 ミサ）池長大司教
2 日	年間第 27 主日	10：15 壮年会例会
4 火	聖フランシスコ（アジ）修道者	
7 金	ロザリオの聖母	初金 7：00 10：00 ミサ
8 土		9：30 大掃除
9 日	年間第 28 主日	10：15 小教区評議会
15 土	聖テレジア（イエスの）おとめ教会博士	13：00 エレミア書公開講座（雨宮神父）
16 日	年間第 29 主日	13：00 エレミア書公開講座（雨宮神父）
17 月	聖イグナチオ（アチカ）司教殉教者	14：00 三日月会ミサと例会
18 火	聖ルカ福音記者	
22 土		壮年会遠足（徳島） 14:30 子供のミサ（ホール）
23 日	年間第 30 主日 世界宣教の日	
24 月		11：00 ベビーとママの集い
28 金	聖シモン 聖ユダ使徒	
30 日	年間第 31 主日	

お父さん、お母さん！

天高く馬肥ゆる秋、灯火親しむ候を迎えました。秋を愛する人は心深き人・・・信仰を深める秋でもあると思います。また10月には体育の日があり、小学校・中学校などでは運動会も行われます。この夏教会では教会学校と中高生会の3泊4日のキャンプがあり親子共々に多くのことを学んだのですが、これからの複雑多様な世界にあって子供たちが心身すこやかに成長するように祈りたいと思います。

私は或る時会議の帰りに東京から新神戸まで新幹線に乗ったのですが、隣りで若い会社員と思われる男性が動き出しても窓の外を眺め、ハンカチで涙を拭いていたのです。関西への出張が単身赴任の方のように思われました。出発前プラットフォームまで見送りに来ていた奥様と小学生の男の子、幼稚園児と思われる女の子と楽しく話し合ったり女の子を抱き上げたりして

いた父親でした。時間になって車内に乗り込んで来られたのですが、二人の子供たちは外から窓を叩きながら「パパ、パパ！」と叫び続けて泣いているのです。そのうち奥様は子供たちを離れさせ、手を振ってお別れするように教えていました。私は新神戸までの車中、何度かこの方に声をかけようかと考えました。こんな優しく素晴らしいお父さんなので、「神戸で時間があれば、六甲教会にいらっしゃいませんか」と・・・しかし、商売っ気は控えて、ご家族の幸せと子供の成長を心の中で祈っただけでした。このお父さんも、同じことを祈っておられたかも知れません。

幼い子供にとって、「おとうさん」「おかあさん」（或いは、パパ、ママ）と呼びかけて、「ハイ、ここにいますよ」、「大丈夫ですよ」と答えてくれる人は、この広い世界にたった一人しか

いないのです。その言葉のやりとりは、親と子の一体感を心のすみずみにまで浸み通らせていくのです。両親の名前が何であれ、世間的に如何なる立場であれ、子供にとって真実な呼名は「お父さん、お母さん」でしかないのです。その名を持つのは世界中でたった一人の人であり、その呼名は血を分けた親と子をつなぐ深い絆を与えていくのです。

子供はその絆の中で、親の愛が如何に尊いものかを学んでいくのだと思います。誰にとっても、また幾つになっても「お父さん」「お母さん」(或いは、父上、母上)と呼ぶ方は永遠に一人だけなのです。天国に行っても、その方は父であり母であると信じています(必ず確かめられる日がやって来るでしょう)。そして、(幸いなことに)優しい優しいお父さんとお母さんになっておられることは間違いありません。子

供に信仰心が育っていくのは、家庭で祈っている親の姿を見ることから始まると思います。逆に、「子供が手を合わせて無心に祈る姿ほど美しいものはない」と言われるように、親が子供に教えられる場合もあるでしょう。親と子の絆は愛と信仰によって結ばれていきます。

或る時のテレビ報道によると、12才の女の子が白血病と闘いながらも、難病や障害をもった子供たちを励ますためにと病床で描いた絵本『一番大切なもの』が彼女の死後出版され、両親によって全国の小児病棟に寄贈されました。闘病の苦しみと死の哀しみを乗り越えた親子の愛がなさしめた偉業だったと思います。この少女は今も天国で「お父さん、お母さん」と呼びながら、いつか会えることを一日千秋の想いで待っているのではないのでしょうか。

桜井神父

各 部 会 だ よ り

壮年会

壮年会では10月22日(土)に遠足に行きます。ポスター、申込書付きチラシなどでもお知らせしていますが、行き先は四国徳島方面。徳島教会訪問と「うだつの町・脇町」散策などです。バス2台の日帰り、定員70名ですので満席になり次第締め切ります。参加料は会員3000円、同伴の大人4000円、中学生以下2000円です。申込み受付は9月の主日ミサ時間帯を中心に行います。

10月例会は10月2日(日)10時15分から第4会議室にて、高山神父様のお話を中心に開きます。

男の料理教室 10月19日(水)

壮年会主催の「おおいに語ろう会」が9月11日午後1時半からイグナチオホールで開かれました。

会場には壮年会メンバーを上回る女性の姿が目立ち、関心の広がりや深さが伺えました。講師は関本クリニック院長・関本雅子さん。「終末期

医療と尊厳死・ホスピスケア」という演題で、とくにホスピスケアの話を中心に、きびきびと話をされました。終末期医療の取り組みと人々の考え方の進歩、変化などのお話。心をうつエピソードもスライドをまじえて紹介されました。講演のあと講師を囲んでの懇親会では、個別に熱心に相談、質問される人も見受けられました。

婦人会

<10月行事>

1日(土) 養成部と共催の「祈りの道場」

7日(金) 初金 ミサ 10:00

その後、各地区トップの集まりを持ちます。

<10月掃除当番>

7日(金) 中2・中3

14日(金) 中4・中5

21日(金) 西1・西2

28日(金) 西3・西4・西5

時間はいつでも9:00からです。

よろしくお祈りします。

バザーのみの市の物品を10月23日から集めます。ご協力の程よろしくお願ひします。

又、食券も10月23日、10月30日、11月6日の各ミサの前後に販売いたします。こちらの方もよろしくお願ひします。

📖三日月会

10月17日(月)14:00～ 三日月会例会
勉強会のテーマの進め方について。ビデオ鑑賞。

📖青年会

<定例会>

10月9・23日(日)12:30～14:00 於：第3会議室

内容：10/9(日) 聖書研究(指導：高山神父)

10/23(日) 分かち合い

(「祈りのはこぶね」を使用)

初めての方も是非気軽に参加下さい！！

📖社会活動部

5日(水) 10:00～ 手芸の集い

バザーに向けて小物作りを致します。

7日(金) 11:00～ 社会活動連絡会

初金ミサ後に始めます。各グループの代表者(バザー出店希望の方)は必ずご出席下さい。

8日(土) 9:30～ 炊き出し

教会台所で用意し、準備出来次第、小野浜公園に移動いたします。ご協力下さい。

28日(金) 14:00～ おにぎり作り

須磨方面夜回りの為に作ります。

📖養成部

「祈りの道場」

10月1日(婦人会と養成部の合同プログラム)

テーマ：「神と人との交流について」

参考図書：池長潤著「祈りと恵みの世界」

11月5日

テーマ：「イエスの弟子となること」

時 間：両日とも午前10時より午後3時。

3時よりミサ。

場 所：両日とも大聖堂

費 用：昼食代¥500.-

申込み：11月分 10月9日(日)～10月23日(日)

聖書週間講演会

カトリックの聖書週間(11月第3～4主日)は『聖書・新共同訳』完成を機にはじまりました。これは、信徒一人ひとりが、神のみことばに日々親しみ生かされつつ、キリスト者として日本の人々にキリストの心を伝えて行くようにと定めたものです。

そこで本年はこの週間を前に、聖書をより深く読み進めるために上智大学教授雨宮慧神父様によるエレミア書の講座をお願いいたしました。

エレミア書は当教会において8月27日の聖書朗読リレーにおいて読み継がれ、感動の時間を持つことができました。この講座を通じて一層の理解を深めることができればと思っております。

「エレミヤ書公開講座」

10月15日(土)

「偶像とはなにか」(エレミア書2章を中心として)

「エレミアの告白」前半部(11章を中心として)

10月16日(日)

「エレミアの告白」後半部(20章を中心として)

「新しい契約」(31章を中心として)

時 間：10月15日(土)、16日(日)午後1時

場 所：両日とも大聖堂

いずれも費用・申込みとも不要

📖典礼部

9月17日 典礼部例会を行い下記項目が検討された

- ・7月典礼勉強会で出た、検討項目について
独唱者は若干会衆に向かって(小聖堂の入口に向う程度)歌う。
子供と共に捧げるミサのアレルヤ唱は、聖書と典礼を使用する。
- ・侍者会(9月3日)の報告
参加者6名(内新規3名)
大人も子供も年に一度は基本に戻り、リフレッシュするように。
参加者が少ないので、アプローチの仕方を考える。
- ・典礼奉仕者(先唱・祭壇奉仕・聖体奉仕)のマニュアルの見直し
先唱・聖体奉仕について検討。聖体奉仕は、聖体奉仕者の集いで配布する。

祭壇奉仕は次回検討する

- ・ごミサの準備、片付けについて。最近ルーズになっています。当日の奉仕者で祭壇の準備、片付け、次のミサの準備をお願いします。
- ・朗読者は自分でマイク位置の調整、必要な方はライトをつけることをお願いします。
また、朗読が終了したら、祭壇奉仕者の先導を待って壇上を降りてください。

📖 図書紹介

いまを生きる言葉 「森のイスキア」より
佐藤初女 著
講談社

佐藤初女さんは、映画「地球交響曲（ガイアシンフォニー） 第二番」に取りあげられた方で、この六甲教会でも講演をされているのでご存知の方も多いことと思います。彼女は、弘前市内の自宅“弘前イスキア”と三方森に囲まれた岩木山麓に“森のイスキア”を開設され、訪れる人をいつでも誰でも温かく受け入れて手作りの料理を共にしながら、それぞれの人のかかえる悩みや苦しみに共感し、多くの人々に生きる勇気を与えていらっしゃいます。

この“イスキア”とは地中海にある島の名で、心を病んだ青年がそこで暮らす内に元気を取り

戻したという物語にちなんでつけられたそうです。

この本は、彼女がどう考え、どのように生きていられるのかを、やさしく短い言葉で書かれています。それは母として、妻として、家庭を預かる私達が心したいことでもあります。例えば“心を込めて食事の支度をしたり、一緒に食卓を囲んだりという、もっとも平凡な営みの中にこそ深い祈りがあると思っています。母性愛とは、言葉を替えれば受け入れること。今の世の中に足りないものは、あるがままの自分を受け入れてくれる場です”と。

この本を読んで、我が家が家族にとっての“イスキア”となるようにと願いました。

(福島)

～ お 知 ら せ ～



下記要領にて、六美会日本画スケッチ作品展を開きます。
ぜひご覧ください。

期 間： 2005年10月8日(土)～10月20日(木)
場 所： イグナチオホール

(六美会一同)

難民支援グループ「ルチア」活動報告

7月に「ルチア」で支援している難民認定申請者のための行政裁判が始まりました。しかし、裁判審理の大部分は通訳が付かず日本語で行われます。裁判資料の中には、難民認定申請者が日本語を正確に理解なさっていたのか疑問な箇所が多々あります。そこで、シナピス難民デスクから「ルチア」に、500ページに及ぶ日本語の裁判資料の読みあわせの依頼がきました。英語の企業内翻訳通訳業務、民間司法通訳人業務をされている佐藤晶子さんを含むメンバー3人が携わり、途中説明を入れながらゆっくりと日本語で読み合わせを進めていきました。この度、佐藤さんが読み合わせを通して知った現実、感じた事、考えさせられたことを書いて下さいました。（長瀬）

ルチアの会のメンバーの方々とともに難民不認定処分に異議を申し立てている方と数回に渡り裁判資料の読み合わせを行いました。難民不認定処分を受けた後、申請者が原告となり、国に対し難民不認定処分取消請求を行うことができます。しかし、この行政裁判に掛かる費用の多くは原告側が負担しなければなりません。

「難民認定申請を上陸日または難民となる事由の発生を知った日からそれぞれ60日以内に行わなければならない」という入管法61条の2第2項に規定されていた厳しい「60日ルール」は昨年撤廃されました。日本の難民認定申請者はやむをえない事情で母国を出て（または母国に戻れず）難民認定申請を行います。申請が迅速に行える場所や状況に置かれていれば問題ないのですが、私自身はそのような環境に置かれた方々にまだ出会ったことがありません。

申請者ご本人がご自分の立場を認識するまでの経緯が記載された公的機関の審理書類などを読み進めていくうちに、ご本人のプライバシーや辛い過去を追体験することになり、憤慨ややるせない思いが募り、読み合わせを中断させてしまうことが何回かありました。

言葉も習慣も異なる国で、少なくとも数ヶ月は入管に収容された後、仮放免の身でまたは収容されたままで一国の司法適法性を問う裁判を起こすのは、支援の手が差し伸べられていても精神的に大変厳しいものであらうと思わずにはいられません。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）発行の難民認定基準ハンドブックに記載されている「灰色の利益（疑わしきは申請者の利益に）」という迫害の恐れのある国への送還と基本的人権の侵害を防ぐために推奨されている国際原則は、日本では適用されない場合が多いようです。難民認定制度が発足した1982年当時、難民認定制度の濫用者が後を絶たなかったため、被告側の国は、原告側の灰色の利益の申し立てを現在も容易に認めません。

はからずも行政裁判の原告となり難民認定を請求し在留資格取得を熱望する方々のプライバシーや人権を尊重し、キリスト者としてどう関わり、どのような支援が必要なのかと時には迷うこともありますが、これからも様々な導きを乞いながらルチアの会の方々と活動を続けて行きたいと思っています。（佐藤）

青年会キャンプ

8月27日(土)、28(日)の2日間、青年会メンバー10名で、広島へキャンプに行きました。

キャンプというよりも、「戦争と平和」について考える錬成会のような内容になりました。

広島の大町教会の信者の方から被爆体験の話を伺ったり、戦争にまつわる場所にいる案内して頂いたり、「戦争と平和」についていろいろ考えるいい機会となりました。

特に、今まで広島を「原爆を投下された街」としか見ていなかったのですが、戦時中は「軍隊に加担した街」だったらしく、広島を「軍隊に加担した街」、「原爆を投下された街」、「国際的平和都市として知られる街」の3つの側面から見られたことは非常によかったと思います。

以下、参加者からの感想です。



今年は戦後60周年を迎えました。そのためキャンプの行き先を“広島”と決定し、“平和”について考えるキャンプとなりました。私たちは広島を訪れる前に、高山神父様と共に戦争についての勉強会を開き、準備万端(?)の状態広島入りしました。

大町教会の高浜さんの案内でいろいろな面から原爆の町“ヒロシマ”を学び、同じく大町教会の服部さんの原爆体験をお聞きすることができました。改めて感じたのは戦争は“苦しみ”と“悲しみ”しか与えない、残らないということです。戦後60年経った今も広島には多くの“苦しみ”と“悲しみ”が残っています。

教皇ヨハネ・パウロ2世の平和アピールにもあったように「戦争は人間のしわざ」です。戦争を回避し、平和を築いていくのも人間だと思います。戦争がなくなる日まで私たちは平和のための行動を続けていかなければなりません。これは私たちの義務であると思いました。

今回お世話になった高浜さん・服部さんと大町教会と庚午カトリックセンターの皆様、ありがとうございました。高浜さんには来年の企画も提案していただきました。平和のために、ぜひ実現させたいと思います。(黒森)

8月末の土日に青年会で広島へ行きました。大町教会の高浜さんと被爆者の服部さんからいろいろお話を伺いました。

服部さんは落ち着いて話しておられて、他の被爆者の書いた絵本を用いるなどして被爆時の状況が想像し易かったです。

服部さんは「水をください。」という被爆死者の叫びと、十字架上のイエズスの「渴く」とを重ね合わせて語り部をやる動機にされているということでそれもとでも印象的でした。

大町教会の地下聖堂の「よき牧者」の絵がとてもよかったです。

(斉藤)

「聖書朗読リレー」に参加して

本年度の朗読リレーはエレミアの預言を中心とし、小聖堂において27日午前8時スタートしました。皆が心を一つにして聖書を読み継ぎ、聖堂の中は一日中祈りと聖なる言葉で満たされました。5時過ぎにリレーが終了したときには皆が感激と深い喜びで満たされました。

エレミアの生きた時代はアッシリアからバビロニアへの覇権移行、南ユダ王国の滅亡という激動時代でした。それはあたかも中国宋王朝が北方に興った国家（遼、金、元）に苦しめられ、滅亡した経緯と酷似しています。北宋の滅亡は靖康の変として知られ、徽宗・欽宗以下皇族・官僚・技芸者など数千人が金王朝によって連行されました。バビロン捕囚を彷彿とさせる事件です。そしてあの「十八史略」は元による南宋の滅亡をもって終っており、如何に重大な歴史的事件であったかを雄弁に物語っています。北イスラエル王国と南ユダ王国の滅亡はこの宋王朝滅亡にも比定される大事件だったのです。

このような激動の世の中を駆け抜けた孤高の預言者エレミアの生き方と教えは現在の日本にも通じるところが少なくなく、私たちにもの心を打つものがあります。 （養成部 山本 恭助）

「聖書朗読リレー」は、教会で、とくに修道院で、行われている伝統的なレクチオ・ディヴィナ（聖なる読書）を思い起こさせます。レクチオ・ディヴィナは、修道会のはじめから、つまりエジプトの修道生活から行われたと言われていています。神のみことばである聖書の言葉を「読み」そして「聴く」ことは、祈りによって神との一致を求める、神のみことばによる黙想です。みことばの意味を考え、記憶し、祈りと黙想をするためのレクチオ・ディヴィナは、聖ベネディクトの『戒律』第48章で勧められていますが、修道生活の枠組みを超えて、現代のキリスト者たちが聖書のみことばを深く味わう必要性を悟らせてくれます。「聖書朗読リレー」は、私どもに伝統的なレクチオ・ディヴィナの一端を体験させてくれただけでなく、今私どもに求められている神のみことばを生きることを教えてくれました。 （木鎌）

～充実した贅沢な10分～

初めて聖書朗読リレーに参加させていただきました。事前に朗読箇所を教えていただき、自宅で練習していったのですが、いざ当日、小聖堂で声を出して聖書を読むとなると、大変緊張いたしました。

「感想をお聞かせ下さい」と言われても、緊張していて何も覚えていない、というのが本音です。

しかし、こちらの教会に来て1年になりますが、今回の聖書朗読リレーも含め、いろいろな行事・活動にお声を掛けていただき、本当に感謝しています。仕事も辞め、知人も誰もいない神戸に来て、どうしようかと思いついていた私にとって、この教会の皆さんは神様が与えて下さった道標だったと思っています。これからも宜しく願いいたします。

最後になりましたが、聖書朗読リレーに参加したことのない皆さん、来年は一緒にいかがですか？ 聖堂であらためて聖書と向き合う、神様の前で声を出して読む、そんな充実した贅沢な10分はいかがですか？ （豊谷）



10月号のテーマ：教会の共同体の中に現存するイエス

イエスの生き方に従う私たちは一人で歩むのではなく、教会の共同体と共にイエスの呼びかけに応えていきます。生前のイエスは弟子たちや人々を直接に集めてくださいましたが、復活後のイエスは聖霊の息吹を弟子たちや人々に送り、今度は聖霊によって教会の共同体を通して、多くの人々を神の方へ導いてくださいます。

教会の共同体について、マタイ福音書では次のように書き記されています。「2人または3人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」(マタイ 18:20)と。イエスの使命を与る者は、誰一人、自分勝手にイエスに従い、自分の都合で人々を呼び集めるわけではありません。まず、先にイエスが私たちに呼びかけてくださり、それに私たちは応えるようになります。私たちのミッションはあくまでも「自分の元に」ではなく、「イエスの元に」たくさんの人々が集まるように、努めていきます。

今月の霊操で教会の共同体に対する私たちの受け止め方を新たにしていきます。現代社会の中で、神を中心にする共同体は数多くはありません。おそらく、神を中心にするより、個人的なカリスマや能力を崇拜する共同体が多いのではないのでしょうか？このような社会におかれている教会の共同体はますます自分たちのアイデンティティーを表明すべきです。

【聖書の参照】使徒 1:3-11、使徒 2:1-41、使徒 2:43-47

(バンバン神父)

教会報 11月号の発行は、10月30日(日)です。 編集会議は10月23日(日)です。 記事原稿は、10月16日(日)正午までに信徒会館事務室へご提出願います。(広報部) http://www.rokko-catholic.jp	六 甲 カ ト リ ッ ク 教 会 〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21 電 話 0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6 発行責任者 桜 井 彦 孝 神 父 編 集 広 報 部
--	--